

尊厳死の論理：『スクラップ・アンド・ビルド』 における死の表象をめぐって

著者	原 朱美
雑誌名	人間学研究論集
号	8
ページ	29-40
発行年	2019-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001020/

尊厳死の論理

—『スクラップ・アンド・ビルド』における死の表象をめぐる—

原 朱 美

はじめに

尊厳死は「本人の意思の尊重」が理念として掲げられ、現在は法制化も目論まれている¹。だが私たちは、この理念を無批判に受け入れてしまってよいのだろうか。尊厳死が推進される真の原動力は、もっと別のところにあるのではないか。

本稿の目的は、尊厳死にかかわる「本人の意思」という概念に疑問を呈し、尊厳死が内包する他者の排除の論理を明らかにすることである。その検討には、2015年に発表され芥川賞を受賞した羽田圭介の『スクラップ・アンド・ビルド』（以下『スクラップ』）を用いる。本作を生権力（説明は以下）の視点から分析することを通じ、尊厳死の真の論理を導く。

文学作品は、それが誕生した社会に深くかかわって存在する。よって、その社会の価値観や文脈が作品中に表現されるのは必然だと思われる。また介護や死などを主題とする小説は、その創作性を活かし、ノンフィクションでは描ききれない実社会の問題を顕在化して表現することが可能である（米村・佐々木、18頁）。

本稿で『スクラップ』を検討材料とする理由もまさにこれらにある。この短編は、28歳の孫が、同居する祖父の尊厳死実現へと拘泥する姿を描く。つまり、家庭というごく狭い空間で尊厳死の問題が提起されるのだが、同時にそれは、現実社会へと繋がる問題としても描写されているのである。また、本作は芥川賞を受賞し人々の関心を集めた。この作品が社会でいかに読まれているのかを検討することにより、私たちの社会と尊厳死との関係もおのずと明らかになるだろう。

論述に先立ち、二つの重要概念について明確にしておきたい。

まず尊厳死を、安楽死との異同に留意しつつ定義する。尊厳死は、治療の継続よりも死を優先するという点で安楽死と共通している。その上で、死を優先する動機が尊厳志向にある場合を尊厳死、それが安楽志向にある場合を安楽死と呼ぶ。だが、この二つの言説をめぐる日本の状況は非常に錯綜しており、現在では安楽死が積極的安楽死（致死性の薬物を投与して死なせること）に限定して解釈される一方で、消極的安楽死（延命措置の不開始、あるいは延命措置の中止）が尊厳死として捉えられることが多い²。

次に生権力である。この権力概念は、フランスの哲学者、M. フーコーによって提唱された。生権力とは、近代以前まで中心的だった殺す権力に代わり17世紀以降に生じてきた新しい権力、すなわち人々を生かす権力のことを指す。生権力についてはⅡで論じる。

具体的な論述は以下の通り進める。

まずⅠでは、『スクラップ』における尊厳死の表象を概観する。Ⅱでは、『スクラップ』を生権力の視点から分析する。ここでは、生権力の作動のもと、孫が祖父を尊厳死に向かわせる役割を担っていることを論じる。つづくⅢでは、それまでの議論を踏まえ、実社会と尊厳死の関係に焦点を当てる。『スクラップ』が描く尊厳死が、実社会でいかに受け止められたのかを検討することにより、本人意思の尊重という理念の疑わしさ、さらに尊厳死が内包する他者の排除について論じる。最後にまとめを行う。

先行研究であるが、死を主題とした文学作品を生権力的な観点から考察したものとして、小松・田中（2016）、西山（2016）がある。また、死を操作したいという願望と尊厳死との関連を論じたものとして児玉（2013）、Dowbiggin（2003）が、さらに尊厳死と他者の排除についての関係を論じたものとして小松（2004）がある。だが、文学作品で描かれた尊厳死の問題を生権力の視点から分析し、そこから尊厳死が包含する他者の排除の論理を導いた論考は見当たらない。この点で本稿は新たな試みといえよう。

以上を踏まえ、実際の検討に入りたい。

Ⅰ. 『スクラップ・アンド・ビルド』における尊厳死の表象

1. 愚痴る祖父と受け止める孫

『スクラップ』は、現在無職で求職中の健斗（28歳）が、米寿間近の祖父（健斗の母の実父）の尊厳死実現に拘泥してゆく短編小説である。まず本節では、死にたいと訴える祖父の言葉を「真摯な態度」（羽田 2015a, 14 頁）で受け止める孫の視点から、この物語を概観したい。

語り手の健斗によれば、祖父はマンションの階段を自力で往復し、入浴もほぼ一人でできる。認知症でもない。つまり祖父は、年齢のわりには「いたって健康体」（11 頁）である。しかし、母と住む多摩ニュータウンの自宅に祖父を引き取って以来3年にわたり、健斗はこの祖父から「もうじいちゃんは死んだらいい」（同頁）、「早う迎えにきてほしか」（10 頁）などの言葉を繰り返し聞かされていた。

そんなある日、健斗はふと、自分が「今まで、祖父の魂の叫びを、形骸化した対応で聞き流していた」（13 頁）ことに、すなわち、祖父の「死にたい、というほやきを、言葉どおりに理解する真摯な態度が欠けていた」（14 頁）ことに気づく。そして、「苦痛や恐怖心さえない穏やかな死。そんな究極の自発的尊厳死を追い求める老人の手助け」（同頁）をしようと決心する。方法は「過剰な足し算の介護を行う」（30 頁）ことである。自立にこだわり、できることは何でもやらせようとする母に隠れ、健斗は祖父に必要な以上に手を貸すことで、脳も身体も使わせないようにした。

健斗自身も、「祖父の尊厳死願望を確認すべく…ベッドへ仰向けになる。…病院やデイサービス施設以外に外出もできず、この閉塞感が生きている間中ずっと続くのか。こんなに辛いのなら、祖父が早く死にたがっていることに間違いはない」（68-9 頁）と確信するのである。

健斗はこのように、「祖父の願望である尊厳死をかなえてやるべく」（22 頁）真剣に考え、行動する。だが、この尊厳死は本当に祖父の願望なのだろうか。

2. 死を迎えさせたいという願望

実は、祖父は一度たりとも「尊厳死」という語を口にしていない。それにもかかわらず健斗は、祖父を「究極の自発的尊厳死を追い求める老人」(14頁)と表現する。いったい彼は何をもって尊厳死といっているのだろうか。

既述の通り、現在の日本で尊厳死という場合は、死期を引き延ばすための人工呼吸器や経管栄養などの不開始、あるいは、それまでしていた延命措置の中止を指すことが多い。しかし、『スクラップ』において健斗がいう尊厳死はこれらとは違う。彼は、祖父が発する「早く迎えにきてほしか」などの言葉を字義どおりに受け取り、そこに祖父の死への意志³を見出し、それを尊厳死と呼び変えることによって祖父が死ぬ手助けをしようとするのだ。

方法は、この時点ではまだ考えていない⁴。よって、ここで彼がイメージする尊厳死とは、死への意志を何よりも重視するがゆえに、その方法がいくらかでも拡大する危険性を孕んでもいる。事実彼は、「勇気一つあれば」(24頁)入水や飛び降りによって「尊厳死」を達成できるはずなのに、その勇気がない祖父を歯がゆくさ思っている。方法いかんにかかわらず、「苦痛のない死を、自分の意志でつかみとってくれ」(96頁)というのが健斗の理想とする尊厳死なのと思われる。

問題は、祖父の死への意志自体が健斗の「大きな思い違い」(116頁)に過ぎないことである。実は、祖父は死にたくないのだ。そのような祖父に対して「尊厳死をかなえてやる」(22頁)ことなど無謀以外の何ものでもないだろう。だが健斗は、遊びに来たひ孫を嬉しそうに抱く祖父を見ても、生きていて楽しいことが祖父にもあるのかもしれないという想像すらできない。自らが押しつける尊厳死の実現に囚われ、「目標をやり遂げるために努力するという、自発的な覇気が〔祖父には〕まるで感じられない」(34頁)（〔 〕内は筆者による捕捉）とイラつき、「なにをすれば困難な目的を最短距離でやり遂げられるのか、教え導いてあげなければ」(54-5頁)、と空回りする。そうやって「尊厳死アシスト」(104頁)に拘泥し続けることにより、祖父を「究極の尊厳死へ全身全霊で向かわせる」(111頁)という強迫じみた観念が抑えられなくなってゆく。

そのような中、祖父が急性心不全で入院する。退院はできたものの以前より弱り、入浴には健斗の介助が必要となった。物語の最終盤のある日、不安がる祖父を無理矢理浴槽の中に残して健斗がトイレに立った隙に、溺れるはずのない、浅く張られた湯の中で祖父は溺れかかる。それを目の当たりにした健斗は、ここに至り初めて、「生にしがみついている」(116頁)祖父に、さらには「究極の尊厳死をかなえてやろうとする親切心とも異なる熱につきうごかされ」(115頁)ていた自分に気づくのである。

健斗がようやく自覚した「尊厳死をかなえてやろうとする親切心とも異なる熱」とは何か。それは、「ただ生き長らえている状態」(63頁)で「未来のない」(90頁)祖父を自発的に死に向かわせたい、つまり、祖父の死をコントロールしたいという願望だったのではないだろうか。この願望は、祖父の意志の尊重という善意にもとづいた大いなるまやかし、すなわち尊厳死という概念を隠れ蓑としながら、彼自身がその願望によって制御不能となる直前まで肥大した。尊厳死をめぐるこの物語は、死のコントロールが完遂される危険性を十分に秘めていたといえる。

では、健斗がここまで祖父の尊厳死に執着し、上記のような願望を増大させていった背景には何があるのか。以下では、『スクラップ』で描かれる社会と健斗との関係を生権力という概念を用いて論じる。

Ⅱ. 『スクラップ・アンド・ビルド』における生権力の作動

1. 生権力とは

『スクラップ』において生権力がいかに作動し、それが健斗とどうかかわっているのかを考察する前に、この権力概念について簡単に整理しておきたい。

20世紀に活躍した哲学者、M. フーコーが導入した生権力は、近代以前まで中心的だった殺す権利（君主＝主権者に与えられた古い型の権力）に代わり、17世紀以降に生じてきた新しい権力、すなわち、人々を生かすための権力である。この生権力は二つの形態において発展してきた。一つは、身体の規律に中心を定め、個人の管理・訓育にかかわるもの、そしてもう一つは、集団としての人間に働きかけ、人口の調整を行うものである（フーコー 1986, 176 頁）。

ただし注意点がある。生権力は人々を生かす、と今述べたが、この権力の作動下においてはすべての人間が生かされるわけではない。フーコーはこれを、「死なせるか生きるままにしておく」という古い権利に代わって、生きさせるか死の中へ廃棄するという権力が現れた（175 頁）と表現した。すなわち、この新しい権力のもとでは、「死の中へ廃棄される」人々が出現してくるのである。

フーコーは、この事態が可能となる理由として人種主義の介入を挙げ、「…それは権力が引き受けた生命の領域に切れ目を入れる方法なのです。そうやって生きるべき者と死ぬべき者を分けるのです」（フーコー 2007, 253 頁）と説明する。ならば、その「切れ目」は誰に対して、どのようにして入れられるのだろうか。つまり、誰がどんな理由で、いかにして「死ぬべき者」として廃棄されるのか。これらの点に関して、フーコーは詳細に論じぬままであった⁵。

対して『生権力の歴史』を著した小松美彦は、生権力が、人々を生かすという以前に「生きるに値する者」と「値しない者」とを弁別していること、しかもその弁別装置が「人間の尊厳」概念であることを指摘する。西欧に伝統的な「人間の尊厳」⁶は、15世紀以来現在までさまざまな社会で広く重要視されてきた概念である。しかしこの概念こそが、人間の身体を軽視すると同時に精神・理性・意識を重視することによって、つまり理性がある状態、意識がある状態という「状態の価値」を重視することによって、「生きる価値のある者」と「価値のない者」とを截然と分別する、と小松は論じているのである（小松 2012, 201, 341-7 頁）。

上記のように生権力を捉えたうえで、以下では『スクラップ』において健斗と生権力とがいかにかわっているのかを検討する。

2. 生権力に飼いならされた健斗—— 1

『スクラップ』を生権力の観点から考察するにあたり留意すべき点がある。それは、作者の羽田が生権力を意識して本作を執筆したのではないかということだ。確かに羽田は、フーコーや生権力について直接的には言及していない⁷。だが、本作に通底する身体へのこだわりやその表象の仕方は、彼がフーコーの権力論、特に『監獄の誕生』で論じられたそれと、本作を関連づけて描いている可能性を窺わせる。

前述の通り、生権力は人間を生かす権力であり、個人に対しては規律的な身体を訓育する力として働くのだった。つまり、軍隊や学校などでの訓練によって個人の身体を調教し、管理システ

ムの中に組み込んで飼いならすのである。健斗には、この生権力に飼いなされた身体としての役割が意図的に与えられているように思われるのだ。

たとえば本作では、祖父が戦時中に軍隊で受けた訓練やしごきが、現在の健斗の自発的な身体の鍛錬や自己規律へのこだわりに転換され、表象される⁸。彼は軍隊的な身体の鍛錬を通して、「みずから権力による強制に責任をもち、自発的にその強制を自分自身へ働かせ」（フーコー 1977, 205 頁）ているといえよう。健斗はまた、「金のためだけでなく医療発展のため、誇りをもって」（羽田 2015a, 98 頁）新薬の治験にも参加する。生権力は、個人の身体の調教にかかわるとともに、人口の調整も行うのだった。彼が提供した治験データは統計的にまとめられ、集団としての国民をより健康な状態で生かすための研究に利用される。健斗は、生権力の装置として作動するこのような方策に自発的にかかわっていくのである。

また、上述のような健斗のふるまいは、彼が多摩ニュータウンで生まれ育ってきたという設定にも意識的に関連づけられているのではないか。

フーコーの権力論に倣ってニュータウンについて論考した内田隆三⁹は、ニュータウンが「快適性の政治学」（内田 2000, 186 頁）に支配された空間であると論じる。すなわちニュータウンは、人々の「快適な生活を求める欲望」（同頁）——清潔、衛生、安全性、精神的な健全性、肉体的な健康など——が収斂された、隙間のない緊密な空間としてできあがってきた。よって、「ここでは空間のデザインがある種のパーフェクション（perfection）に志向している。逸脱や反抗、遊び、隙間…などを受け入れる余地はミニマムに押さえられ」（内田 2002, 378 頁）、「…空間それ自身（に込められた非人称の視線）があらゆる角度から〔人びとの〕身体を見ている」（同頁）のだ。別言すれば、ニュータウンとは、それ自体が「規範主義的な空間」（同頁）であり、「人びとは身体性の水準でこの緊密な空間設計に調和するように訓育される」（377 頁）のである。

出生以来、多摩ニュータウンで過ごしてきた健斗もその一人だといえよう。健斗の自己規律へのこだわりや自発的な身体の鍛錬は、若き日の祖父の軍隊経験との連関を窺わせると同時に、彼がこの空間で暮らす中で内面化させてきた、特に心身の健康に対する快適性への規範化された欲望の表れでもあるのではないか。

だからこそ、快適さを志向するこの空間の調和が乱されるような事態に対して、健斗は敏感に反応する。3年前に健斗の母に引き取られ同居するようになった祖父を彼がこれほど意識するのはそのためだろう。祖父は常に心身の不調を訴え、歩けるにもかかわらず食べ終えた皿を自分で台所まで運ぶことを嫌がり、死にたいと言い続ける。つまり祖父は、健康で快適な状態を好しとするこの空間の規範から逸脱しているがゆえに、その規範を内面化して従順に従う健斗の心をかき乱す存在なのである。

内田は、快適性を志向する緊密空間にそぐわない身体、つまり健斗の祖父のような身体が、「…放置され、廃棄され、消えてゆく」（381 頁）ことも少なくないと指摘する。換言すれば、生権力の作動下において、このような「異形の身体」（同頁）は「生きるに値しない者」として廃棄される可能性に晒されているといえよう。

このことを健斗の側から見ると以下ようになるだろう。彼は、「自分のことがなあんもできんごとなったら終わりやね」（羽田 2015a, 63 頁）と訴える祖父を、「[したいことなどなにもでき

ないがただ生き長らえている状態」(同頁)だと評する。すなわち小松のいう「状態の価値」にもとづいて、祖父を、尊厳を失ってただ生きているだけの状態として捉えているのだ。このような状態の祖父に尊厳を取り戻させるための措置をとること、つまり尊厳死を迎えさせること¹⁰こそ、健斗にとって、祖父と自身の快適性を同時に充足させる唯一の選択肢だと思われたのではないか。生権力に飼いならされた人間としての健斗は、「生きるに値しない者」を死の中へ廃棄するというこの権力の負の方向への作動にも、自らかかわろうとしたといえよう。

このようなあり方の健斗にとって、尊厳死は、自分と祖父という二者の関係に留まる問題ではない。次節では、彼が尊厳死をいかに社会に位置づけているかを考察する。

3. 生権力に飼いならされた健斗—— 2

健斗にとって「祖父は数年前に同居するようになったよくわからない存在」(羽田 2015b, 308 頁)だ。それゆえ彼は、肉親である祖父を世間一般の老人とまったく同じレベルで捉えている。尊厳死にかんしても彼のこの姿勢は変わらず、祖父と社会一般の老人世代とを一括りで語る。よって健斗にとっての尊厳死の対象者は、ニュータウンという空間を越え、祖父のように「穏やかに死にたがっている老人たち」(羽田 2015a, 70-1 頁)すべてである。

それだけではない。実は健斗は、尊厳死の対象となる基準として、老人たちが表明する死への意志のみならず、経済効率も重視している。彼が、内田の言う資本主義社会の欲望が収斂した場としてのニュータウンで生育されたことを思えば、それは当然なのかもしれない。経済効率にもとづいた超合理的思考は、彼の確立されたスタイルなのだ。だから健斗は、「死にたい老人たち」が医療や社会保障の財源を多く消費して、「国庫や健斗たち世代の貯蓄を間接的に蝕んでい[る]」(43 頁)ことに不満を抱く。そこから、「穏やかに死にたがっている老人たちの手助けをすることは、老若双方にとって利害が一致している」(70-1 頁)という持論を展開するのである。

生権力と資本主義は深く繋がっている。生権力は、管理された個人の身体を生産機関へ組み込み、集団としての人口を経済プロセスにはめ込むことによって資本主義の発達にかかわってきた(フーコー 1986, 178 頁)。すなわち、資本主義が極限まで発達した現代社会とは、生権力が一層強力に作動している社会なのである。そして、この生権力の働きはといえば、人間を生かさせるだけではなく、「生きるに値する者」と「しない者」とを二分して後者を死の中へ排除するというものだった。

このような社会にとって、上記の健斗のような思考は非常に好都合であろう。なぜなら彼は、本来であれば国家や社会に向けるべき医療政策や社会保障に対する批判の矛先を高齢者へと向け、彼らを尊厳死へと向かわせるような言動に自ら及んでくれるからである。国家や体制にしてみれば、健斗は、経済的な面で生かさせるのに手間のかかる者たちを尊厳死へと向かわせる、つまり「生きるに値しない者」を廃棄するための方策に自らかかわってくる、便利な存在なのだ。生権力に飼いならされた従順な身体としての健斗の役割は、このような点にも見出されよう。

以上、生権力の観点から『スクラップ』を分析した。本作はフィクションである。だがこの物語は、私たちの社会から生み出された産物でもあるのだから、社会の信条や価値観をまったく反映していないということはある得ないはずだ。私たちは、たとえニュータウンで暮らしていなくとも、健斗と同様、健康で快適な生活に対する欲望を抱き、知らず知らずのうちに経済効率主義

的な考え方をしているのではないか。健斗の極端に偏った視点から描かれた尊厳死をめぐる問題は、現実社会の問題が究極的にデフォルメされたものでもある、とはいえないだろうか。

そこでⅢでは、ここまでの検討をもとに実社会における尊厳死の問題に焦点を当て、尊厳死が内包する他者の排除の論理について議論する。

Ⅲ．尊厳死の論理とは何か

1. 尊厳死法制化の現在

『スクラップ』との関連で尊厳死の問題を検討する前に、尊厳死をめぐる日本の現状を簡単に確認しておきたい。本稿冒頭で述べたように、現在、わが国では尊厳死（内実は、消極的安楽死）法制化が目論まれている。さかのぼると、2005年に日本尊厳死協会¹¹の働きかけによって、超党派による「尊厳死法制化を考える議員連盟」が設立された。この議員連盟が、2012年3月と6月に「終末期の医療における患者の意思の尊重に関する法律案」（いわゆる尊厳死法案）の第一案と第二案を公表した¹²。その後（2015年）、同連盟は現在の「終末期における本人意思の尊重を考える議員連盟」に名称を変更している。

2018年9月の時点で、上記法案のいずれについても国会提出には至っていない。だが同連盟会長の増子輝彦参議院議員は、2017年11月、「来年の国会での法案提出に向けた努力をしたい」¹³と発言しており、法案上程のタイミングを狙っていることに変わりはないだろう。他方、2018年9月16日付の毎日新聞によれば、自民党内のプロジェクトチームが上記の法案を根本から見直し、本人意思の確認に力点をおいた新法案への練り直しに着手したという¹⁴。早ければ2019年の通常国会への提出が目指されているとのことから、今後の動きを注視する必要があるだろう。

上記のような尊厳死法制化議論で常に強調されるのが、本人の意思の尊重である。上述の議員連盟の名称変更において「尊厳死法制化」の文字が消され、「終末期における本人意思の尊重」が前面に押し出されたのも、社会にこの理念をより強く印象づけるためだろう。

だが、本当に本人の意思は尊重されているのか。また、本人の意思を尊重しさえすれば、もはや尊厳死に問題は残されていないのか。これらを議論するために、2では再び『スクラップ』に戻る。ただし今度は、本作の書評などの検討を通し、尊厳死が現在の私たちの社会でいかに捉えられているのかを検討する。その後3において、本人意思の尊重という理念の疑わしさを述べ、尊厳死が内包する他者の排除について論じる。

2. 『スクラップ』に対する評者の反応

本作は2015年上半期の芥川賞を受賞した。その選評で、健斗は「幼稚」「天然ぼけ」¹⁵などと評されているが、その理由は述べられていない。

また、尊厳死が言及されるただ一つの選評でも、それを健斗が言い出したことは問われていない¹⁶。読売、朝日の両新聞における書評もほぼ同様である¹⁷。

日経新聞の書評のみ、「死にたい」と言った時に本気で心配されたらばかにされたと思うだろう、と断った上で、祖父の死にたいという発言に対する健斗の大真面目な姿は「いかにも滑稽に映る」と述べる。「そのうえ「苦痛や恐怖心さえない穏やかな死」を祖父が迎える手伝いを決意

する姿には、隠せぬ悪意も感じるはずだ」、と核心をついている¹⁸。

しかしこの書評では、作品内で健斗によって連呼される尊厳死という語がいったい登場せず、「死にたい」という祖父のほやきが、孫により「尊厳死願望」へと転換されていることが不問とされている。ここで重要なのは、尊厳死を持ち出したからこそ、健斗は自身の奥底に潜む「悪意」に無自覚のまま祖父の死を推進する方向へがむしゃらに向かっていったということではないか。すなわち、尊厳死という言葉あるいはイメージこそが、健斗に、悪意を善意として疑わせなかった元凶だったのではないだろうか。

細心の注意を払って受賞作を読んでいるはずの選考委員や読者の代表たる書評者たちが、本作の尊厳死をめぐる矛盾や違和感について言及していない。尊厳死が本人ではなく孫によって叫ばれること、つまり、尊厳死が擁護されるときに頻繁に取りざたされ、法制化議論においても中心的概念となっている「本人の意思の尊重」が遵守されていないことについて等閑視されてしまっているのである。

このような事実こそ、尊厳死がよいイメージを伴って現在の私たちの社会に深く浸透してしまっていることの、よって、批判の対象ですらないことの証左ではないか。それは同時に、『スクラップ』の健斗がそうであったごとく、尊厳死の裏に隠れた死を操作したいという願望が、そうとは認識されないままに私たちの中で肥大しているという証でもないだろうか。

3. 尊厳死の論理とは何か

前節では、『スクラップ』を題材に、尊厳死をめぐる本人意思の軽視に対する無批判を指摘した。では、本人の意思が尊重されてさえいれば、尊厳死になんら問題はないのだろうか。

『スクラップ』では、現在の祖父の姿を見た健斗が、将来の自身の死について考えをめぐらせ、以下のように語っている。「…老人を尊厳死させる革命戦士たる自分がいつか老人になってしまい白い壁や天井を眺めるくらいしかやる事がなくなったとき、もっと若い世代が穏やかに殺しに来てくれれば本望だ」(羽田 2015a, 71 頁)。すなわち彼は、将来の自分が今の祖父と同様の状態になったら尊厳死したい、さらに、苦しくなければ、殺されても構わないとさえ思っているのである。ここにおいて、彼のイメージは尊厳死＝殺人にまで膨らんでいるのだ。そして、ここまで極端ではないにしろ、延命治療を望まない者——ここには「将来の自分」も含まれる——には尊厳死を認めるべきだという声¹⁹は、私たちの社会にも溢れている。

だが、死に対する「私の意思」はそれほど揺るぎないものなのだろうか。私たちの思考や感じ方は常に変わる。健康な「今の私」が将来動けなくなってしまったとき、「将来の私」が「今の私」と同様に考え、感じるという保証は、実はどこにもない。

加えて、「私の意思の尊重」をことさら強調するのは、上記の健斗のように他者との比較がその根底にあるからだろう。すなわち、「今こうなっている(＝白い壁や天井を眺めるくらいしかやる事がなくなってしまった)他者のようになるのは嫌だから、将来、もし私がそうなった場合は、私自身を尊厳死によって排除する」ということである。このように考えることで「今の私」は、「将来の自分」が、「今こうなっている他者」と同じような存在にはならないことが約束されたように思える。しかも、尊厳死というよい死に方で最期を締めくくれるように思えるのだ。しかしそれは結局、「今こうなっている他者」は、「私が将来そうなった場合」と同様に、排

除されてもかまわない、あるいは、排除された方がよい、と無意識のうちに思っているということではないか。

問題は、自らが無意識のうちに抱くこのような願望が、確固たる目的を持った権力に巧みに利用されていくことである。現代は、生権力が強力に作動している社会だということは既に論じた。このような社会において私たちが心の内に抱く、「将来の」自己、および他者の死を操作したいという願望は、尊厳死と呼ばれるイメージのよい何ものかに姿を変え、生権力の弁別装置として社会が「生きる価値のない」人々——この中には、医療費や社会保障費を多く消費し、経済的側面から生きさせるのに手間がかかると見なされた者たちも含まれよう——を「死の中へ廃棄」することに手を貸すのである。

そして、「今の私」たちによる尊厳死推進の声に応じて国家や体制が社会の仕組みを変えてゆくとき、真っ先に周縁へ、さらにその外側へと追いやられるのは、「今、こうなっている他者」、つまり「生きる価値がない」と思われている人々だ。彼らは、『スクラップ』の祖父が自身の視点を焦点化させて語る機会をいっさい奪われていた²⁰ように、「今、語る言葉を持たない他者」である。そうであるがゆえに、社会の中で彼らの心情はまったく考慮されない。このようにして、語れない人々や語る言葉を持たない人々が生きにくい社会が形成されてきた。

さらにこのような社会は、「今の私」が将来語る言葉を奪われたとき、つまり「今こうなっている他者」にいつか自分がなったときには、誰にとっても生きづらい場所になってしまっている可能性が高い。それでも「今の私」は、尊厳死が「私」のみにかかわる問題だと心から言い切れるだろうか。

この社会で尊厳死を語る「今の私」は、その語る言葉を奪われた他者を排除する権力とともに、彼らを死の中へ廃棄しようとしている。尊厳死は、それがどのような方法で達成されるのであれ、他者の排除の論理をその内に含み込まざるを得ない死のコントロールである。

おわりに

本稿では『スクラップ』における尊厳死の表象をめぐる検討を通じ、尊厳死には、他者を死へと向かわせるような作用がもともと内包されていることを明らかにした。だが、私たちはそのことに気づかず、結果、尊厳死はこの社会に浸透、拡大し続け、現在では法制化も目前の状態にある。

尊厳死がこのように支持されるのは、この死に方によって、その名に冠された「尊厳」を守ることができる、あるいは、健康をひどく損なって失った自身の尊厳を取り戻すことができると信じられているからだろう。『スクラップ』の健斗も、「したいことなどなにもできないがただ生き長らえている状態」（羽田 2015a, 63 頁）の祖父を人間の尊厳が失われた状態だと捉え、「穏やかな尊厳死」（22 頁）の追求によってその回復を企てたのだった。

しかし私たちは、ある人の、もしくは将来の自分の健康がひどく損なわれたからといって、死をかけて「尊厳」を守る必要があるのだろうか。重要なことはもっと別なところにあるはずだ。それは、ある状態になったからといって死んでもよいのちはないということである。守るべきものはいのちであり、そのいのちをかけてまで守るべきものは何もない。

少なくとも私たち一人ひとりが、いのちに対するこの思いを社会で共有していれば、心身が健全な状態でなくなった将来の自分が、あるいは、今さまざまな理由で語る言葉を奪われて死の際にいる人々が尊厳死の方がよい、という短絡的で安直な議論には陥らないはずである。

そもそも私たちは、気がついたときにはすでにこの世界に存在していたのではなかったか。そして、これだけ医療技術が発達した現代でさえ誰もが死を避けられない。つまり、死そのものだけに焦点を当て、それを自分だけの意思で操作することはできないのだ。『スクラップ』の健斗も、最終的にはこのことを悟った。彼は、人間というものが、「どちらにふりきることもできない辛い状況の中でも、闘い続けるしかない」(121 頁) 存在だということに思い至ったのである。

尊厳死は、特にそれを擁護する立場から、「決して他人の死を左右するものではありません」(長尾, 109 頁) と強調されてきた。しかし、尊厳死によって自分の死を操作したいという願望は、必ず、自分が他者に対して抱くそれに繋がってしまう。加えて、私たちは自分の意思のみが存在して生きているわけではなく、自分の身体がこの世界に存在することで生きている。生きて闘い続けるのは「私」の身体である。だが同時に「私」の身体は、決してひとりでは生きられない。

そうであるなら、私たちが力を注ぐべきは「人間の尊厳」を掲げて尊厳死を推進することではないはずだ。そうではなく、誰でも、またどのような状態でも、今ここに生きていることそのものに価値があることを皆で共有したい。今の社会でそれができないというのなら、私たちが尽力すべきは、それができるような場所にこの社会を変えていくことである。

注

- 1 尊厳死法制化の現状は、Ⅲの1で論じる。
- 2 尊厳死と安楽死をめぐる日本の特殊な状況については、小松(2012)の24-8頁を参照。
- 3 『スクラップ』では、「苦痛のない死を、自分の意志でつかみとってくれ」(羽田 2015a, 96 頁)というように、死に対する思いを表現するさい、「意思」ではなく「意志」が使用されている。これは健斗の死に対する思考のあり方、つまり積極的で強い気持ちを窺わせる表現だと思われるため、本稿でも本作にかかわる部分では「意志」を使用する。
- 4 この後、健斗は介護職として働く幼なじみに助言をもらい、過剰な足し算の介護を行って心身の機能を「ぜんぶいっぺんに弱らせること」(27 頁)により、尊厳死を実現しようとする。だが、「弱らせる」とは具体的にはどういう状態を指すのか、また、弱らせた後どうするのかについては、物語の最後まで触れられていない。
- 5 小松美彦は、この点に関して以下のように述べ、フーコーを批判する。「フーコーは一繋がりの人間種の中に境界線を引いて二つの人種に弁別するのだと単に言っているだけで、どうしてアリア人とユダヤ人の間に境界線を引くのか、健常者と障害者の間に引くのか、どこに亀裂を入れるのかということに関しては何ら答えていない…」(小松 2013, 104 頁)。
- 6 「人間の尊厳」概念の歴史的検討は、小松(2012)に詳しい。特に204-11 頁、341 頁を参照。
- 7 羽田は、自身が描く小説と社会が抱える問題との関係について以下のように述べるに留まる。「小説は表面がすべてで、たとえ深いテーマを描いていても、その輪郭を読者に安易に感じさせてはいけない」(羽田・島田 2015, 26 頁)、つまり、「他人にとってはどうでもいいような小さな問題の切れ端を安易に大きな社会問題に結びつけて書くのではなく、まずその問題をリアルに見つめて描くことで、大きなテーマが段々とわかってくる」(羽田 2015b, 315 頁)。
- 8 たとえば、健斗は「オシャレ坊主」(羽田 2015a, 47 頁)と称して頭を七分刈りにする。その髪型で上半

身の鍛錬に熱心に励んでいると、祖父が現れ、自分も軍隊にいた頃にそれ〔＝ 健斗が励んでいる上半身の鍛錬〕を「きゅうこうか〔急降下〕」って言われてやらされた」(52 頁) と言う。途端に、健斗は「自分の身体が色を失い白黒になり、オシャレ坊主カットが丸刈り頭になった気」(53 頁) になる。このように本作では、祖父と異なる世代の健斗が、祖父の軍隊経験の一部について、形を変えて追体験する。しかも祖父にとっては体制からの強制でしかなかったそれらの体験が、健斗にとっては自発的に行うべきものになっている。

- 9 内田はニュートウンを「混在郷」、つまり「異質のものがその異質性のままそれぞれ孤島のように横たわっている不安な海のような空間」(内田 2002, 363 頁) と捉え、そこで作動する権力関係をフーコーに倣って論じている。この「混在郷」については、もともとフーコーが、P. ラビノウから 1982 年に受けたインタビューでごく簡単に言及している (Foucault 2000, 361)。
- 10 健斗は、祖父に尊厳死を迎えさせることが祖父の尊厳を取り戻すことだと明言しているわけではない。だが、尊厳死を扱った米国映画『ミリオンダラー・ベイビー』(2004) を観た彼は、全身不随になった女性ボクサーの願いを聞き、彼女を死に至らしめた老トレーナーに共感する (羽田 2015a, 75 頁)。実際にこの映画を観てみると、冒頭で、「これ〔ボクシング〕は尊厳のスポーツ。人の尊厳を奪い、それを自分のものとする」という (日本語訳の) ナレーションが入っているのである。試合中に相手に殴られ全身不随になってしまったボクサーは、自身の尊厳を奪われたことになるのだろう。彼女が尊厳死を選んだのは、その奪われた尊厳を取り戻すためだったのだろうし、それが冒頭のナレーションで示唆されているのだと考えられる。健斗はこの映画を「すばらしい作品」(同頁) と評し、監督で件の老トレーナー役も演じた C. イーストウッドを称賛する。よって、この映画の「失われた尊厳を尊厳死によって取り戻す」という論理は健斗にも共有されており、祖父に対しその手助けを行うのが自分ということになるはずだ。
- 11 「日本尊厳死協会」は 1976 年に「日本安楽死協会」として発足し、安楽死法制化を目指していた。だが、安楽死という言葉がナチスを連想させ社会に受け入れられなかったため、1983 年に現在の名称に変更し、消極的安楽死を尊厳死と呼んで尊厳死法制化への活動を続けてきた。
- 12 法案の中身については、小松 (2015) に詳しい。
- 13 『週刊アエラ』「『尊厳ある死』を準備する『本人の意思』と『医師の責任』がせめぎ合う現場」2017 年 11 月 20 日、26-7 頁。
- 14 『毎日新聞』「延命中止 意思確認に力点 終末医療 自民、新法検討」2018 年 9 月 16 日 朝刊。
- 15 芥川賞選考委員による、健斗にかんする主な選評は以下の通り。小川洋子：「『スクラップ…』」の評価は、幼稚な健斗をどれだけ受け入れられるかにかかっていた。その上で、とばけたユーモアのある小説にも、あるいは祖父と孫との間に不気味な闇が立ち上ってくる小説にもなる可能性があった。しかし結局、そのどちらにもなりきれなかったのでは、との思いが残った」(芥川賞選評, 294 頁)。島田雅彦：「羽田圭介得意の論理を畳み掛けてくる語り口は健在だが、実は語り手は天然ばけでもあるところが笑える」(298 頁)。
- 16 祖父の尊厳死について言及したのは堀江敏幸のみ。だが堀江は、「失職・求職中の語り手が八十七歳の祖父の尊厳死に手を貸すため、体力を奪うことを目的とする過剰な介護を行う」(295 頁) と述べるに留まり、健斗が尊厳死を言い出したことには触れていない。
- 17 『読売新聞』書評では、「男〔健斗〕は、祖父の尊厳死願望を確かめるために眠たくもないのにベッドに横たわってみる」とあり、健斗が尊厳死を言い出したことが不問とされている。評者は若林英輔。 (『読売新聞』「『スクラップ・アンド・ビルド』羽田圭介著 真実への静かな確信」2015 年 8 月 16 日 朝刊)。『朝日新聞』書評は、「老人の『早う死にたか』という愚痴を何度も聞くうち、この孫はそれを言葉どおり受け止め、“自発的尊厳死”を助けようと決意」と、自発的尊厳死に引用符を付けているものの、これ以上の説明や議論はない。評者は瀧井朝世。(『朝日新聞』「書評 売れている本『スクラップ・アンド・ビルド』羽田圭介著」2015 年 9 月 13 日 朝刊)。
- 18 『日本経済新聞』「スクラップ・アンド・ビルド、祖父の望み、まじめに受ける一羽田圭介著」2015 年 8 月 23 日 朝刊。評者は市川真人。
- 19 たとえば『読売新聞』「終末期の尊厳死 法制化の議論を (気流)」2018 年 3 月 15 日 朝刊など。
- 20 『スクラップ』においては、終始、健斗の視点のみが焦点化されて語られる。祖父にはその機会がまったく与えられていない。

参考文献一覧

- 芥川賞選評 2015「第153回平成27年上半期芥川賞決定発表」『文藝春秋』第93巻 第10号、290-9頁。
- 内田隆三 2000「郊外ニュータウンの〈欲望〉」若林幹夫他『「郊外」と現代社会』青弓社、175-214頁。
- 2002「ニュータウンの光景」『国土論』筑摩書房、356-89頁。
- 児玉真美 2013「死の自己決定権のゆくえ——尊厳死・「無益な治療」論、臓器移植」大月書店。
- 小松美彦 2004『自己決定権は幻想である』洋泉社。
- 2012『生権力の歴史——脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐる』青土社。
- 2013「尊厳死法における生権力の作動——呼吸か「いのち」か ×市野川容孝」『生を肯定する——いのちの弁別にあらがうために』青土社、79-120頁。
- 2015「尊厳死の問題点を考える——小松美彦氏講演会載録」『週刊読書人』2015年1月23日。
- 小松美彦・田中智彦 2016「「ヘルシヤム化」する世界——『わたしを離さないで』（小説／映画／ドラマ）を解説する」『週刊読書人』2016年3月18日。
- 長尾和宏 2014『延命治療で苦しまず平穏死できる人、できない人』PHP研究所。
- 西山けい子 2016「管理される生と生きられる身体のあいだに——『ウィット』に描かれる終末期医療」亀山佳明編『記憶とリアルの行方——文学社会学の試み』新曜社。
- 羽田圭介 2015a『スクラップ・アンド・ビルド』文藝春秋。
- 2015b「「綿矢りささんに先を越されたと思った」受賞者インタビュー」『文藝春秋』第93巻 第10号、308-15頁。
- 羽田圭介・島田雅彦 2015「対談 天然ボケのユーモア」『文学界』第69巻 第9号、22-31頁。
- フーコー、ミシェル 1977『監獄の誕生——監視と処罰——』田村俣訳、新潮社。
- 1986『性の歴史Ⅰ——知への意志』渡辺守章訳、新潮社。
- 2007『社会は防衛しなければならない——コレージュ・ド・フランス講義1975-1976年度』石田英敬・小野正嗣訳、筑摩書房。
- 米村みゆき・佐々木亜紀子編 2008『〈介護小説〉の風景——高齢社会と文学』森話社。
- Dowbiggin, Ian. 2003, *A Merciful End: The Euthanasia Movement in Modern America*, NY, Oxford U.P.
- Foucault, Michel. 2000, "Space, Knowledge, and Power," *Power: Essential Works of Foucault 1954-1984 Volume Three*, Ed. James D. Faubion, Trans. Robert Hurley and Others, NY, New Press, 349-64.